

少数民族観光とイメージ表象 —北タイ「山地民」をめぐる観光を事例に—

石井 香世子

はじめに

本報告は、北タイにおける観光の文脈での「山地民」の表象から、エスニック・マイノリティ表象をめぐる主体と受け手のあり方の実態を把握することを目的に行った調査の結果報告である。ここで報告される現地調査は、2001年12月19日から2002年12月30日および2003年12月21日から2004年1月3日にかけて、北タイの町チェンマイで行われた。調査の目的は、外国人観光客に対して、北タイにおける「山地民」をめぐる観光イメージを、特に山地民博物館と「山地民」の村を訪ねるトレッキング・ツアーに関わる各主体がどのように表象するかを調査することであった。

タイには、主流民族であるタイ系諸族と、その他の少数民族が住んでいるとされる。2002年度版『タイ国内20県高地居住者統計』によれば、2002年時点のタイ国内に住む「山地民」人口は923,257人ということになっている¹⁾。これは、タイ全国人口6,346万人(2002年)の14.5%にあたる²⁾。

「山地民」(Chaw Khaw)という用語は、政府が1959年に「山地民福祉委員会」を設置した際に創出された官製用語である(Bhruksasri 1985: 2)。20世紀半ば、アメリカとの安全保障上の関係に強く影響されていた当時のタイ政府は(ラダワン 1988: 106)、ラオスとの国境地帯にあたる山岳地帯の住民のバンコク政府への忠誠心を得ることに

安全保障上の関心を高めた。このためタイ政府は、「山地民」への開発・福祉という名目で山岳地帯の住民への関与を強めた(Walker 1981: 15)。こうした背景を受けて、国際機関・「西側諸国」とタイ政府とが共同で行う「開発援助」という形で、数々の「山地民」の調査・コミュニティ開発プロジェクトが行われていった。

このときタイ政府は、「山地民」を、タイが抱える国家的・国際的な問題の原因だとし、山岳地帯への関与を正当化していった。しかし一方で、このとき当時山岳地帯の住民に対して付与された「アヘン栽培者、焼畑耕作による森林破壊の元凶、国家安全保障上の脅威」という『山地民』開発の根拠とされた『山地民』の問題性には、〔それが本当に妥当なものだったかどうか〕疑問が残る」と指摘する声もあった(Kesmanee 1994: 673, Vienne 1989: 48)。

ところが、1970年代からタイが国家規模の観光開発を始め、北タイでも外国人観光客を受け入れるようになると、「山地民」の文化が外国人観光客を惹きつける観光資源であることが明らかになってきた。これを受けて今度は観光産業の文脈で、「山地民」は素朴で、昔ながらの生活を守り、色鮮やかな民族衣装を身につけた秘境に住む少数民族というイメージが広められていった(Cohen 2001: 68, Harron 1991: 41, Meyer 1988: 412)。しかしこういった素朴で昔ながらの生活を守る人々というイメージが観光

1) Krom phatna sangkhom le sasadikan krasuang kanphatna sangkom le khwam mankhong kh ong manusaya 2002

2) 詳しくは巻末の図表1を参照のこと。

資源化されていったのと平行して起こったのが、山岳地帯への国家行政・市場経済の浸透であった。この結果、観光資源としての「山地民」イメージと、山岳地帯に住む人々の生活や意識との乖離が進んだ (Cohen 2001: 16, 39, 64, Harron 1991: 42)。

ここで問題として指摘されるようになったのが、こうした観光資源としての「山地民」イメージが、イメージを投影される村人自身の手を離れた観光産業のメカニズムを通じて生産され、消費される点である (Cohen 2001 64-66, 67 Kesmanee & Charoensri 1994: iii 豊田 1996: 139)。

では、そうした問題は、なぜ生じるのだろうか。この点を明らかにするためには、「山地民」をめぐるイメージと人々の関係、つまりイメージを操作する主体と操作される主体、利用する主体と利用される主体との関係について考察を試みる必要がある。

本稿ではまず、分析・考察の材料となる現地調査結果の報告を行うものとする。具体的な事例としては、山地民博物館およびトレッキング・ツアーという、観光資源としての「山地民」イメージの消費がもっとも顕著に行われる 2 つの場を分析の対象とする。

1. 聞き取りの実施場所・実施期間と方法

本聞き取り調査は、2003年12月21日から1月2日にかけて、チェンマイ市およびその周辺で行われた。具体的な場所は、旅行代理店の店頭、ホテル、飲食店、公共交通機関など、観光客が旅行の中で訪れ、地元の人々とコミュニケーションを取ることができる場所である。聞き取りの目的を、外国人観光客に対してそれぞれの立場にある主体が「山地民」をどのように表象するかという点に絞り、可能な限り英語（ただし相手が外国語を習得していない場合に限り

タイ語）で聞き取りを行った。この際、外国人観光客としての立場を貫くため、テープレコーダー等は使用しなかった。ただし記録は、聞き取り後 2 時間以内に会話の内容にできるだけ忠実に、できるだけ原語のままノートに書き残すという作業を行った。

本稿の終わりに添付したインタビュー結果一覧は、そのノートに書き残されたすべてのインタビュー結果を、時系列に沿って記したものである。なおこの際、文章の趣旨のみを同じ文体で記載した。本文中に記載した会話は、これらのうち筆者が特に特徴的な反応のひとつと見なしたものを、現地でのノートの文章を直訳したものである（ただし、会話体のうち、文章として読みにくくなる部分については適宜修正した）。

2. 質問対象と質問項目

以下では、山地民博物館を中心とした、「山地民」と「山地民」以外の地元の人々、観光ミドルマンによる、お互いの認識についての語りを比較する。具体的な質問対象者は、カテゴリー別に「山地民」「外国人観光客」「地元住民」「観光ミドルマン」の4つに分けた。所要時間は場合によって異なるが、それぞれのカテゴリーに対して、20人を目安に聞き取り調査を行った。基本的に20人を超えた時点で聞き取りをうち切った。対象者の選定には、12月25日から1月3日までのチェンマイ、ターペー通り滞在期間中に出会ったすべての人々に、本人が語った自己アイデンティティに基づいて上記カテゴリーのどれかを割り当て、順番に無差別に同じ質問内容を尋ねた。質問内容は、以下のとおりである。

(1) 「山地民」への質問

a. 「あなたは何人ですか (pen khon arai kha)」

- b. 「山地民博物館を知っていますか」(知っている と答えた場合)「山地民博物館とはどんなところですか」
- c. 「トレッキング・ツアーを知っていますか」(知っている と答えた場合)「トレッキング・ツアーとは、どんなものですか」(質問の意味を問り返された場合)「トレッキング・ツアーに参加すると、『山地民』について、よりよく知ることができると思いませんか」
- d. 「トレッキング・ツアーのガイドなど、トレッキング・ツアーを運営しているタイ人の人たちについて、どう思いませんか」(質問の意味を問り返された場合)「彼らは、『山地民』について特別な知識を持っているのでしょうか」

(2) 「外国人観光客」への質問

- a. 「トレッキングツアーに参加しましたか」(参加したと答えた場合)「トレッキング・ツアーはどうでしたか」
- b. 「山地民博物館は行きましたか」(行ったと答えた場合)「山地民博物館はどうでしたか。どんなことを知ることができましたか」
- c. 「あなたは『山地民』について何か知っていますか。彼らの文化を見に行く価値はあると思いませんか」

(3) 「地元住民」への質問

- a. 「あなたは何人ですか」
- b. 「山地民博物館を知っていますか」(知っている と答えた場合)「山地民博物館とはどんなところですか」
- c. 「あなたは『山地民』について何か知っていますか。彼らの文化を見に行く価値はあると思いませんか」

(4) 「観光ミドルマン」への質問

- a. 「あなたは何人ですか」

- b. 「トレッキング・ツアーはどんなものですか」
- c. 「山地民博物館はどんなところですか」
- d. 「『山地民』とは、どんな人たちですか」

では、これらの質問に対する人々の反応はどのようなものであり、そこからどのような特徴が見えてくるのだろうか。

3. 「地元一般住民」として語られる「山地民」の視点

各質問に対する個々の調査結果は、巻末の表2から表5に示したとおりである。これらをもとに上記の質問に対する反応をまとめると、6つの特徴が挙げられた。そのひとつは、「地元一般住民」としての「山地民」の主観の存在であり、2つめは2種類の「ミドルマン」に共通する被保護者としての「山地民」表象である。3つめは「観光客」自身の立場による「山地民」認識の違い、4つめは「観光客」自身の立場による「山地民」認識の違い、5つめは「山地民」の中の立場の多様性、6つめは山地民博物館に対する認識の違いである。

まずひとつめの「地元住民」としての「山地民」とは、外国人観光客が「地元住民」と認識して接する人々、たとえばホテルやゲストハウスの従業員、ウェイターやウェイトレス、タクシー運転手といった人々の中には、町住みの人(=都市部在住タイ人)のアイデンティティを持つ人と「山地民」(でもある)というアイデンティティを備える人と、両方の主体が含まれているということである。聞き取り調査開始時点の筆者には、「地元の人々」というカテゴリーは、「山地民」に対する一定の認識を共有している、町住みの“タイ人”集団を指すという仮説があった。しかし実際に聞き取り調査を始めると、30人中2人が聞き取り調査開始時点では自分自身を「町の人」と語った

にも関わらず、話の後半には自分を「山の
人」と語るようになった。またこの 2 人以
外にも、自分で明確に「自分は山の人であ
る」もしくは「『山地民』と区分される）民
族である」とは語らず「チェンライの人」な
ど出身地で自分のアイデンティティを示し
た人の中にも 2 人、上記 2 人と同様な
語りーつまり、自分を町の人もしくは北
タイの人と称して聞き取り調査に答えてい
るのだが、それ以外の 26 人の語りと「山地
民」の認識方法が明らかに異なる語りー
をする人々がいた。

上述の 26 人がした語りにも共通した特長と
して挙げられる点は、「『山地民』は、はる
か遠くの山奥に住んでいる滅多に会えない
人々である」という認識に基づいた語りで
ある。そして彼らはほぼ一様に、自分は「山
地民」に対する差別感や偏見を持っていな
いという態度を示す。「『山地民』の人たち
の村々も、もうタイ政府や王室プロジェク
トの努力によって、すっかり発展している
んだよ」という、「山地民」社会に対する理
解と寛容を強調する。これに対し上述した 4
人の語りは、一様に「『山地民』の人は、町
の中のどこでも当たり前に見える」という
ものであった。それに加えて「町に住んで
いる『山地民』の人は、すでに『町の人』
だ」という「山地民」の町の人への可変性
を示した。

ここから言えることは、外国人観光客が
「地元の人」(＝「山地民」とは異なる町住
みの「タイ人」として接する人々は、「山
地民」に対する認識の仕方から 2 つのカテ
ゴリーに分けることができるという点であ
る。ひとつは、前者のような「『山地民』は
遠くの山にいる人」とする自分自身が「山
地民」というアイデンティティをまったく
持たない人の認識であり、もうひとつは、自
分自身が「山地民」としてのアイデンティ
ティと「町の人」というアイデンティティ

を何らかの形で併せ持っている（もしくは
そうと理解される）人々の認識である。こ
の結果、聞き取り調査開始時点での聞き取
り対象のカテゴリー分けは、実はカテゴ
リー分け自体が交錯する重複部分を持って
いたのである。この点は、分析を進める上
で重要だと言えよう。

4. 2 種類の「ミドルマン」に共通 する被保護者としての「山地民」 イメージ

聞き取り調査結果の特徴として 2 つめに
言えることは、トレッキング・ツアーを運
営するツアーガイドや観光代理店従業員と
いった観光ミドルマンと、トレッキング・ツ
アーについて問題点を指摘する山地民博物
館館員という 2 種類の「ミドルマン」の、
「山地民」自体を語る語り方は、ともに「山
地民」を被保護者として語るという点であ
る。

今回の聞き取り調査において、「ミドルマ
ン」として意見を収集した人々は、大きく
分けて 2 種類に分けることができた。ひと
つは、トレッキング・ツアーを紹介もしくは
運営する旅行代理店従業員やトレッキン
グ・ツアーガイドといった、トレッキング・
ツアーをめぐる観光ミドルマンである。も
うひとつは、こうしたトレッキング・ツアー
を「(「山地民」社会に対して) 問題を引き
起こすもの」として語る傾向のある山地民
博物館館員たちである。この 2 つのグル
ープは、「山地民」社会の観光化という点に
関しては異なる意見を持つ傾向がある一方
で、「山地民」に関する語りそのものに関し
ては、どちらのグループも「(タイ政府の支
援・努力によって) すでに発達した人々」
「可愛そうな立場にある人々」「彼らの文化
を守るために (われわれタイ人が) 努力し
なければならない人々」という、「山地民」
を被保護者として語る視点そのものには違

いがなかった。つまり、「山地民」イメージを商売に利用しているという立場にあるツアーガイドや観光代理店従業員といった観光ミドルマンも、それを問題視する傾向がある山地民博物館館員も、実は「山地民」を被保護者として語る傾向は共通しているといえる。では、こうした「山地民」をめぐるミドルマンの間の関係は、どのような構造をなしているのだろうか。この点の詳しい分析については、別項に譲ることとする。

5. 観光客自身の立場による「山地民」認識の違い

3つめの特徴として言えることは、観光ミドルマンや観光媒体が発信する「山地民」イメージは、受け手である観光客自身の立場によって、多様な受け取られ方をするという点である。北タイ観光の中で、一様に外国人観光客として「山地民」観光を消費する人々も、観光客自身の属性や背景によって、多様な認識の仕方をしてるのである。たとえば、自分のももとの所属社会において主流民族としての立場を持つ欧米からの観光客は、ほぼ一様に、トレッキング・ツアーや山地民博物館の感想を「大自然の中の素朴な生活は素晴らしかった」「(観光客として彼らの社会に金を落としたことで)『山地民』社会に貢献できてよかった」といった感想を語る。これに対し、「人間の写真を動物のように撮る他の観光客にぞっとした」「彼らの静かな生活を乱しに行つて罪なことだ」という感想を語ったのは、アジア系英国人や、東欧からカナダへ移民した夫婦など、自分の主流社会でエスニック・マイノリティとしての背景を持つ人々であった。また、マレーシア人や日本人といった、近隣の国々からやってきたアジア系の観光客は、「たいしたことはない」「まあ、よくある観光のネタだ」と、「山地民」の存在と

その文化に対する特異性の認識がそれほどないという点に特徴があった。これは、素晴らしいと評価するにせよ酷いものだと憤慨するにせよ、いずれにしても「山地民」に特異性を付与して語る欧米各国からの観光客との違いがあるとも言える。ではこれは、「山地民」イメージにどのような影響を与えているのだろうか。この点の詳しい分析については、別稿に譲ることとする。

6. 「山地民」の中の立場の多様性

4つめに特徴として挙げられることは、「山地民」イメージの表象および「山地民」をめぐる表象媒体(トレッキング・ツアーや山地民博物館など)に関して、『『山地民』として』という一枚岩的な表象/認識主体の集合は存在しないという点である。

インタビューの結果、自分を「山地民」もしくは「山の人」、「(『山地民』と区分される)〇〇民族」と語る人でも、大学生や専門学校生としてタイ社会にある程度適応して生きている若い世代の人々は、山地民博物館やトレッキング・ツアーに対して、特に否定的な見解は持っていない傾向があった。こうした人々は、山地民博物館については『『山地民』の文化を広めるのによいところ』と肯定的な見解を示したり、「あるのは知っているが、行ったことはない」など、自分自身と博物館に展示される「山地民」文化との間に、関連性を強く認識しない、もしくは「山地民」アイデンティティをまったく持たない地元住民と同じような反応を示した。またトレッキング・ツアーに関しても、「(『山地民』の村に貨幣収入の機会を増やすのだから)いいのではないか」といった反応を示し、良きにつけ悪きにつけ、トレッキング・ツアーについて特に深く考えたことはないという反応を示す。これもまた、「山地民」アイデンティティを持たない「地元住民」と同じ反応である。

しかしその一方で、山の村に生活を送りながら商売その他の理由で常に々町社会とやりとりをしている人々や、町の内外で「山地民」としてのアイデンティティを前面に押し出して生活している人々は、山地民博物館、トレッキング・ツアーどちらをも「にせもの」「金儲け」といった表現で否定的に語る傾向があった。

さらに普段山の村に住み、町の社会や人と、ほとんどやりとりのない村人の場合、山地民博物館に関しても、トレッキング・ツアーに関しても、存在は認識しているが自分や自分の村とは直接関係がない事象として認識していた。彼らの場合、肯定否定どちらの“意見”も持っていない。むしろ、自分なりの見解をもつだけの情報が与えられていないのである。これは、「山地民」に関するイメージ市場やイメージ戦略に、一般の山住みの村人が参与する機会がほとんどないという現状をあらわしていると言えよう。

そしてまた、チェンマイ市内に住む、自分を「『山地民』と区分される）〇〇民族」と語る人々でも、タイ市民権を持たず、タイ語を読まず、みやげ物売り等をしているビルマからの難民たちは、山地民博物館やトレッキング・ツアーの存在そのものを全く認識していなかった。筆者が聞き取り調査した範囲では、彼らは「山地民」というカテゴリーの存在さえ知らなかった。ここから、(政治的)単位としての出現が言われて久しい、タイ国内の山岳地帯の貧農が所有権の主張などを訴える政治的手段のうちのひとつとして登場している「山地民」というまとまりからさえ、外にいる人々の存在が浮き彫りにされる。

つまり、山の村での日常生活ではタイ社会／「山地民」社会という区別を認識していない人々や、町の中で難民として生きる人々の多くにとっては、山地民博物館や「ト

レッキングツアー」という概念自体が存在しないのである。上述の著者が行った質問に対しては、彼らは「知らない」「何のこと」という返答をした。

以上のように見ていくと、自分自身を「山地民」と語る人の中にも、様々な「山地民」表象の方法があり、また、外部が「山地民」と定義する人々自身も、「山地民」という自己アイデンティティを持っていない場合もあり、認識は多様である。つまり「山地民」は決して一枚岩的な表象主体として区切ることにはできない。では、これは「山地民」社会および「山地民」と「タイ国」との関係に、どのような影響を及ぼしているのだろうか。この点の詳しい分析については、別稿に譲ることとする。

7. 主体の立場による山地民博物館 に対する認識の違い

そして6つめの聞き取り調査結果の特徴として挙げられることは、主体の立場による山地民博物館に対する認識および認識度の違いである。山地民博物館というひとつの事物をめぐる認識度は、「山地民」としてタイ社会の周縁もしくは周辺に生きる人々、タイ社会の外で日常生活を認識している「山地民」の人々、「山地民」というアイデンティティを持ちつつ地元住民として生きる人々、「山地民」というアイデンティティを持たない地元住民、また観光ミドルマンや観光客といった、それぞれの人々の立場によって、まったく異なる。

「山地民」としてタイ社会の周縁もしくは周辺に生きる人々、つまり都市部や都市周辺に「山地民」の村を形成して生きる人々や、山岳地帯の村に住みながら農作物の売買やその他生活手段のために、都市部に日常的に出てくる人々は、山地民博物館の展示内容を否定的に語り、「本物／もっと良いものは、山の村にある」と、山の村にある

「伝統」や「文化」の真正性を強調する傾向がある。

この一方で、山の村で生活し、町へ買い物へ行くのは年に数回という、タイ社会の外で日常生活を認識している山住みの村人は、山地民博物館の展示内容について問われても、特に語る言葉を持ち合わせていない。否定的にも肯定的にもならず、「そう（山地民博物館と）いった場所があることは知っている」という反応しか返ってこない。またこれに比べ、「山地民」というアイデンティティを持ちつつ北タイ社会の中である程度適応して生きる人々は、山地民博物館を自分とは直接的に関係のないものとして、ほかの北タイ社会の住民と同じような認識の仕方—あることは知っているが、別に行ったことはない—という反応をするか、「山地民博物館は、『山地民』の文化を保存する場としてよいものだ」という反応を見せる。さらに、北タイ都市の内部に住みながら、商品の売買以外には都市社会との関係が極端に少ないビルマ国境を越えてきた難民である人々は、山地民博物館の存在自体を全く認識せず、タイ社会の周縁で形成されている「山地民」という社会単位やその構成員との関係がほとんど断絶していることがわかる。

この一方で、「山地民」というアイデンティティを持たない町住みの地元住民は、山地民博物館の存在は知っているが、外国人観光客のための施設として認識しており、自分たちが娯楽や教養のために訪れる場所という認識は持っていない。こうした人々は様に「（山地民博物館というところが）あることは知っているが、行ったことはない／別に行きたいとも思ったことがない」という反応を示す。こうした人々にとって、「山地民」という存在は、観光の文脈で語られるように、見るに値する変わったもの、もしくは古きよき時代の生活を守って

いる素朴な人々、というイメージは共有されていないことがわかる。

また同じ「地元住民」であっても、観光ミドルマンの人々は、外国人観光客としての筆者の質問に様に、「山地民博物館は興味深いところであり、見るに値するところ。『山地民』の文化をいろいろな人々に知ってもらうためにはよい場だ」という反応を示す。しかし、そのように山地民博物館に対して肯定的な反応を示すミドルマンの人々に対して、「山地民博物館には何があるのですか」という質問をすると、それに対して返ってくる答えが『山地民』の人たちがいて、衣装や工芸品を売っている」といった事実とかけ離れたものであったり、「『山地民』の人たちについて、色々なことがわかる」という極めて中傷的な答えでしかない。ここから、観光ミドルマンの人々も、自分自身が山地民博物館を訪れたことがないという点では、ほかの「地元住民」の人々となんら変わらないことがわかる。

さらに、外国人観光客の人々は、山地民博物館について聞かれたとき、「ためになる場所」「『山地民』についていろいろ知ることができる場所」として語る。また、ここで特に興味深かったのが、「トレッキング・ツアーで本物を見たのだから、いまさら博物館に行く必要はない」という、トレッキング・ツアーを通じて得る「山地民」に関する知識を、博物館で得られる知識より上位に位置づけている人々が存在することである。ここからは、トレッキング・ツアーを通じて得る「山地民」の情報は、真正性が高いために価値が高いという認識が、観光客の中に存在することを意味しているといえよう。

つまり、同じ山地民博物館という場に対する認識も、各主体によって、認識のされ方が異なるのである。以上のように見ていくと、山地民博物館をめぐる認識および認

識度は、同じチェンマイ市内にいる人々であっても、それぞれの立場によって異なるということが出来る。では、これは、エスニック・ミュージアムをめぐる表象と、それがエスニック・マイノリティー社会に与える影響に、どのように働いているのだろうか。この点の詳しい分析については、別稿に譲ることとする。

おわりに

これまで見てきたインタビュー調査結果の整理から、以下の5つの特徴が挙げられた。まず1つめは、「地元一般住民」として情報を発信する人のうち、「山地民」としての主観も併せ持つ人々の存在である。また2つめは、観光産業に直接的に携わる旅行代理店社員やトレッキング・ツアーガイドといった観光ミドルマンと、観光産業の問題点を指摘する側にある博物館員という、2種類の観光ミドルマンに共通する、被保護者としての「山地民」表象のあり方であった。また3つめは、観光客自身の所属社会における立場の違いが、観光客の「山地民」認識に対して影響を与えるという点である。そして4つめにわかったことは、外部者が行う「山地民」というカテゴライズは、外部者によってカテゴライズされている人々自身にとっても同一のカテゴライズが認識されていたり、実態として機能しているわけではないという点である。さらに5つめは、山地民博物館を例とした、外部者の手によるエスニック・ツーリズム上の観光資源としての「山地民」関連機関に対する、外部者が「山地民」とカテゴライズする人々の中の認識の違いである。

こうして浮かび上がってきた、「山地民」と観光をめぐる異なる主体間の認識の相違は、果たして北タイ地域社会における観光とエスニック関係にどのような影響を与え

ているのだろうか。その点について、次稿以降で詳細に検討していきたい。

参考文献

- Bhruksasri, Wanat, 1985, *Government Policy Concerning Ethnic Minority Groups in Northern Thailand*, Paper presented to the Northwest International Education Association, Chiang Mai. Chantaboon, 1994: 5
- 古家晴美, 1993, 『山地民』と『山の民』—北タイ『チャウ・カウ』研究への新たな視座を求めて—『民族学研究』58 (1): 29 - 48
- 石井香世子 2000 「タイにおける『山地民』概念の変遷」『法學政治学研究』46 pp.631 - 655
- Kesmanee, Chupinit, 1994, "Dubious Development Concepts in the Thai Highlands: The Chao Khao in Transition," *Law & Society Review*, 28: 673 - 86
- Krom phatna sangkhom le sasadikan krasuang kanphatna sangkom le khwam mankhong khong manusaya, 2002, *Thamniap chonbonphwnthisung 20 cangwat naai phrathetThai P.S.2545*, Krom phatna sangkhom le sasadikan krasuang kanphatna sangkom le khwam mankhong khong manusaya
- Kunstadter, Peter, and Sally, Lennington, 1983, "Hmong (Meo) Highlander Merchants in Lowland Thai Markets Spontaneous Development of Highland-Lowland Interactions," *Mountain Research and Development*, 3 (4): 363 - 71
- Millikan, M.F. and Blackmer M.L.D. 1961. *The Emerging Nations ^ Their Growth and U.S. Policy*, Little, Brown and Company, Boston (石沢元晴訳『低開発諸国の近代化—その過程と対策』日本外政学会, 1962年)
- Marlowe, D. 1979. "In the Mosaic: The Cognitive and Structural Aspect of Karen-Other Relationships" In Keyes. C. *Ethnic Adaption The Karen on the Thai Frontier with Burma*
- 本岡武 1967. 「タイ国際政治の長期的動向を規定する条件—ひとつの観察—」『季刊国際政治』67 (1)
- パンスーン, ラダワン, 1988, 「タイ王国の外交政策—第二次大戦後から現在まで—」『アジア太平洋研究』成蹊大学アジア太平洋センター 5: 101 - 18
- 末廣昭 1993. 『タイ開発と民主主義』岩波文庫
- Tapp, Nicholas, 1986, "Geomancy as an aspect of Upland-Lowland Relationship," Hendricks et. al. eds, *The Hmong in transition*, University of Minnesota
- Toyota, Mika. 1998, "Urban Migration and Cross-Border Networks: A Deconstruction of the Akha Identity in Chiang Mai," *Southeast Asian Studies*, 35 (4): 197 - 223

Vienne, Bernard, 1989, "Facing Development in the Highlands: A Challenge for Thai Society," John McKinnon and Bernard Vienne eds., *Hill Tribes Today:*

Problems in Change, White Lotus-Orstom (TRI-Orstom Project), 33 - 60

図表 1 : 山地民人口統計 (2002 年度)

民族名	人口
カレン	438,131
モン	153,955
ミエン	45,571
アカ	68,653
ラフ	102,876
リス	38,299
ルア	22,260
ティン	42,657
カム	10,573
ムラブリ (ピートンルアン)	282
山地民グループ合計	923,257
パローン	2,324
トンスー	226
タイルー	3,780
チンホー	26,325
タイヤイ	21,411
クメール	1
チン	4,376
ビルマ	1,237
モン	6,825
ラオ	104
その他	563
少数民族グループ合計	67,172
高地居住タイ	212,720
総計	1,203,149

(出典 : 『thamniap chonbon pwnthisung 20cangwat naiprathetthai P.S. 2545』)

図表 2: 「山住民」の人々へのインタビュー

No	日	性	年	職業	アイデンティティ	博物館	トレッキング	ミドルマン	山住民
1	12/25	男	40代	農業	モン人	あんなものは駄目だ。意味がない。あそこには本物なんて何もない。本物の村へ行けば、もつとつづといいいもの(衣装に施された刺繍など)がたくさんあるのに、何でみんなあんなところにばかりいくんだらう。	トレッキング・ツアーは、偽者の村にだけ行っている。本物の村にしかない、いいものは、なくなってしまう村ばかりに行っている。	彼らは何も知らない。あんなものは駄目だ。	
2		男	30代	農業	モン人	意味がないものばかり集めたところ。	あんなものは観光客向けのにせものだ。	彼らは普通のタイ人の観光業者だ。別に山の村のことを知っているかどうかは関係なくやっっている人たちだ。	
3	31	男	40代	NGO 職員	タイ人でない人・自分自身(ここで自分の個人名を言う)	よく知らない	行ったことがある。「山住民」文化を守るのによいとところだ。	よく知らない	
4		男	40代	NGO 職員	チェンライの人・リス	よく知らない	行ったことがある。「山住民」の伝統文化を守るためによいとところだ。	よく知らない	
5		男	20代	NGO 職員	カレン	よく知らない	「山住民」の文化を学べるよとところだ。	よく知らない	
6		女	20代	NGO 職員	カレン	よく知らない	「山住民」の伝統文化を保護し、一般の人々に「山住民」文化を知る機会を提供するのによいとところ。	よく知らない	

No	日	性	年	職業	アイデンティティ	博物館	トレッキング	ミドルマン	山住民
7	1/1	女	40代	農民(市場に 新年の衣装を 作るための買 い物に来てい た人)	リス	チェンダオの博物館で しよ。チェンマイでも 知られていないとは 名なんだね。	外国人観光客が来る村 もあることは知ってい る。でも詳しいことは 知らない。	よく知らない	「山住民」には、山にい る人もいるし、町にど のような生活をしてい るかは、人それぞれだ。
8		女	20代	農民(市場に 新年の衣装を 作るための買 い物に来てい た人)	リス	チェンダオにあるやつ ね。入ったことはない けど、知っているよ。	村によってはたくさん 外国人観光客が来る。 でも自分の村の近所に はそういう村はない。	よく知らない	
9		女	10代	農民(市場に 新年の衣装を 作るための買 い物に来てい た人)	リス	そう(山住民博物館と) いった場所があること は知っているけれど、 行ったことはない。ど こにあるのか、詳しい ことはよくわからな い。		よく知らない	頭のいい子は、町の学 校に行っている。私は バカだから、村に帰っ てきちゃった。
10		女	30代	土産物売り (屋間、市場の 道端で)	アカ(ビルマから来て 10年)	知らない	知らない	知らない	山から来た人。
11		女	30代	土産物売り (屋間、市場の 道端で)	アカ(ビルマから来て 10年)	知らない	知らない	知らない	山から来た人。
12		女	30代	土産物売り (屋間、市場の 道端で)	アカ(ビルマから来て 5年)	知らない	知らない	知らない	チェンマイの町の中 に、たくさんいる人た ち。
13		女	30代	土産物売り (夜、観光施設 で)	リス(町の学校を出た)	「山住民」のことを知ら ない人が、自分たちの 儲けのために勝手に 「山住民」のイメージを 飾って儲けている。	トレッキング・ツアー というのには、あくどい 旅行者たちが儲けて いる。	山のことを何も知らな い人々が、好き勝手な 話を適当につくって儲 けている。	
14		女	20代	土産物売り (夜、観光施設 で)	リス(山で育った)	知らない	よくわからない	知らない	

No	日	性	年	職業	アイデンティティ	博物館	トレッキング	ミドルマン	山地民
15	2	男	10代	専門学校学生	カレン	「山地民」の文化を学べる場所。伝統文化を伝えていくのによいところだと思う。			
16		男	10代	専門学校学生	カレン	あることは知っているけれど、別に行ったことではない。			
17		女	50代	物売り(夜、観光施設で)	リス	本物はあんなところにはない。	「山地民」の中の一部の人たちが町の人とつるんで儲けているんだ。	村の中の悪い奴が、町の悪い奴と組んで儲けているんだ。	
18		男	20代	学生	カレン	知っている。行ったことではないが、「山地民」の文化をみんなに知ってもらえるのにはいい場所だと思う。	いくつかの村へ行っているようだが、自分には直接は関わらないので何とも言えない。	ガイドと言えば高給取りだ。なれるものならば自分もなりたいが、英語力が足りないのが残念だ。	普通にチェンマイにたくさんいる人。彼らの中には、両親の家が山にある人もいる。しかし、両親の家が田舎にあつてチェンマイに住んでいる人というの普通の話だ。
19		男	10代	ウェイター	山の人	知っている。あちこちに沢山ある。自分が行ったことがないが、「山地民」の文化を知りたい。でも、自分は「山地民」だから、わざわざ博物館に行かなくても文化をよく知っているから、行く必要がない。	西欧人観光客がいくつかの村に行っているようだ。自分はそれについてよくは知らない。	山の村について何も知らない人たちだ。	
20		女	40代	物売り	山の人	知っているけれども、行ったことはない。「山地民」文化を知りたいければ、いい所なのではないか。	知らない	よく知らない	チェンマイ市内やチェンマイの周りに、普通にいくつもの村があつて、「山地民」も沢山いる。

図表3：外国人観光客へのインタビュー結果

No	日	性	年	トレッキング	博物館	その他山地民
1	12/21	女	10代後半 (ベルギー人)	感動した。自然を感じた。	存在は知っているが、行っていない。	知らない
2		女	10代後半 (ベルギー人)	「山地民」へ寄付 (donate) できた。自分たちが参加したトレッキングツアーは、人より高い値段を払ったが、それはツアーを主催した NGO が「山地民」へ還元してくれるのでよかった。	存在は知っているが、行っていない。	知らない
3		女	10代後半 (ベルギー人)	見識が広がった。	存在は知っているが、行っていない。	知らない
4	22	男	20代 (ドイツ人)	非常に良かった。ジャングルの中を筏で下ったり、山岳少数民族の老婆とコミュニケーションを取ったり、貴重な経験をたくさんできた。	あるのは知っているが、行っていない。	山奥で、静かな生活を送っている人びと
5	23	男	60代 (カナダ人/東欧からカナダへの移民; 妻との会話は英語でも仏語でもない母国語)	ああいうのは、好きじゃない。山奥で静かに生活している人たちを見て世物にして、彼らの静かな生活を乱しているのだから。ああいうのは、世界中どこに行ってもあるといえはあるのだが、罪なことだよ。	行ったかもしれないが、あれがそうだったのか? 印象にない。	知らない
6		女	60代 (カナダ人/東欧からカナダへの移民; 夫との会話は英語でも仏語でもない母国語)	特別魅力的なものは何もなかった。	行ったかもしれないが、あれがそうだったのか? 印象にない。	知らない
7	24	男	30代 (イギリス人)	衰れを感じた。人間の写真を動物のように撮る人々に憤りを感じた。自分には写真を撮らなかつた。金を恵むという行為は嫌だったの、その代わりにみやげ物を買った。こうすれば、対等な関係のまま彼らに金が渡るから。その代金は、彼ら自身や家族のために使ってほしいという願いを込めて。	行っていない。	知らない

No	日	性	年	トレッキング	博物館	その他山住民	
8	25	女	20代 (アメリカ人)	すごく違うと思った。こんな生活もあるのかと思った。自分には絶対でさかない。	行っていないわ。(チェンマイに着いた次の日にまずトレッキング・ツアーで山に2泊3日も行ってしまっただけ。本物を見てきたのだから、今更博物館に行くのも馬鹿らしいでしょ。	知らない	
9		女	60代 (アメリカ人)	素晴らしかった	(博物館で) わたしの国の先住民 (Native People) とあまりにも共通点が多くて驚いているところよ。アメリカン・インディアンの人々と、顔の広さ一目と目が離れて、横にだっただっ広いーなどの特徴が、そっくりなの。アメリカン・インディアンの人々は、米河期にベering海峽を渡ってきたというから、アメリカ大陸を南下した後、今で言う太平洋の南洋諸島のあたりも米で繋がっていたのを歩いてきて、タイまでやって来たに違いないわ。先住民の人々の血統は、ひとつに違いないわ。ここ(=この山住民博物館)に来たことで、びっくりするような発見をしてみたわ。ええ、すごく興味深かったわ、ここに来て。		これまでで何も知らなかったが、知りたい
10		男	10代 (オーストラリア人)	これから行くのが楽しみです。	(オーストラリアの) アボリジニたちとまた違う、興味深い文化や生活習慣があるのを知ることができた。	知らない	
11		男	40代 (オーストラリア人)	これから行くのが楽しみです。	大変興味深い、予想していたのより小さな博物館でびっくりした。彼らの結婚式や葬式といった儀礼・儀式 (ceremony) についてもっと展示や解説があれば、もっと興味深かった。そういうことについても知りたい。	知らない	

No	日	性	年	トレッキング	博物館	その他山地民
12		女	30代 (スイス人)	素晴らしかった。自然と触れられたことも、ここでしか会えない不思議な民族の人々に会いに行ったことも。	とてもよい。彼らの生活様式がそのまま再現されている部分に気が入った(籠をしつらえてある部分のことを指している)。	
13		男	40代 (スイス人)	とてもよかった。自分の一生のうちには、本物の首長族を見ることがあると思っていた。大変な驚きだった。	とても興味深く気に入った。ただ、首長族についての展示が少ないのが惜しいことだ。ああした神秘的で世界に例をみない風習を持つ民族については、もっと詳しく展示すべきだ。	よく知らないが、(トレッキングに参加して)興味を持ったので、いろいろ知りたいと思っている。(トレッキングで訪れた)首長族の村では、男性は一人も見かけなかった。とても不思議なことだ。何か神秘的な理由があるのだろうか。知りたい。
14	26	女	30代 (ドイツ人)	素晴らしい経験だった。雄大な自然の中に静かに暮らす「山地民」の人々の生活に感銘を受けた。象に乗れたのは長年の夢がかなって幸せだった。	行っていない。博物館を見てもつまらない。本物を先に見に行ってみよう。	竹の固い床の上に、ごろりと寝ている、信じられないくらい原始的(primitive)な人々。自分はあんな生活はできない。
15	27	男	70代 (イギリス人)	とてもよかった。	行っていないが、非常によいらしい。	子供が、山の斜面をダンボール紙に乗って滑っており、どろどろであった。あれは、自分の祖国イギリスでは既に見られなくなってしまうた「幸せ」の情景だ。しかし、彼らの生活の中にも既にテレビがあったり、プラスチック製品を使っていたりして、昔のままの生活というわけには行かない。でも、自分たちの昔ながらの生活を守り、町の人々から搾取されないようにするため、山の上での生活を守っているのだ。
16		男	10代 (オーストラリア人)	素晴らしかった。あんな人生を許される人が現代社会に存在するとは驚きだった。	まだ行っていないが、(村の生活を見て)ぜひ行ってみたいと思う。	彼らは、山から降りたいとも思っていない人々だし、自分は、彼らが絶対に山から降りてきてはいけないと思う。彼らの素晴らしい生活が破壊されてしまうのを見るのは忍びない。

No	日	性	年	トレッキング	博物館	その他山住民
17	31	男	60代 (日本人)	大したことはなかった。いかにも観光向けに作られた感じがした。	大したものはなかった。	大したことはなかった。「山住民」の村と言って連れて行かれたら、土産物屋ばかりだった(行き先＝ドレイプイ)わざわざ行くだけ時間の無駄。
18		女	60代 (日本人)	いかにも観光向けの感じがした。	小さくて、大したものは置いてない。	大したことはない村だった。
19		男	10代 (マレーシア人)	どこにでもある感じの観光地だった。ああいうのは、中国や、どこに行ってもよく見られるから、みんな一緒になってしまう。	行っていいない。	知らない。
20		男	40代 (マレーシア人)	まあ、あんなものだろう。「首長族の村」に土産物屋しかなかったが。	行っていいない。	東南アジアを、国境を関係なく焼畑をして回る民族のひとつだろう。しかし詳しいことは知らない。

図表 4: 「町の人」へのインタビュー結果

No	日	性	年	職業	アイデンティティ	博物館	その他山地民
1	12/21	男	30代	書店店員	町の人 (中国系、チェンマイ生まれ、チェンマイ育ち)	行ったことにはある。いろいろなものが見られる。興味深いところ (本当に行ったことはなさそうな曖昧な話しぶり)。	町の人ともうしなくなってしまう生活をしてる人
2		女	20代	レストラン店員	町の人 (チェンマイ郊外)	行ったことはないけれど、あるのは知っている。山地民博物館というのには、チェンマイの町の中にも外にも沢山ある。	山に人
3	22	男	30代	トラック運転手	町の人 (チェンマイ郊外)	行ったことがある。「山地民」の帽子やバッグが色々買える。いいところ。	山の上にいる人。自分とあんまり変わらな。みんな町の学校へ来て勉強しているの、言葉も話せる。
4	23	男	40代	カーディーラー・レストラン運転手	町の人 (チェンマイ郊外、4年間の中東出稼ぎ経験あり)	(自分も) 行くよ、行くよ。時々子供たちを連れて行く。「山地民」の人がいて、彼らの古い文化を知ることができる。	そこら中にいる人。うーん。何が自分たちと違うのか。服が全然違う。観光開発から「山地民」が利益を得ているかについては、写真を撮らせてたり土産物を売ったりするので、「山地民」も観光によって潤っている。
5		男	30代	ゲストハウス・スタッフ	町の人 (チェンライで生まれ、チェンマイの町で仕事を10年以上)	行ったことがある。いいところだ。「山地民」について知りたかったら、あそこへ行けば、何でもいろいろある (実際には行ったことなさそうないま話しぶり)。	山の上にいる。(本人たちと何が違うのかと聞かれると、答えて詰まる。) 衣装が違う。いろいろ、違いがある人。
6	24	男	40代	乗合タクシー運転手	町の人 (チェンマイ郊外)	欧米人 (観光客) がよく行くところ。自分も行ったことがある。いいところだった。本物の「山地民」がいっぱいいて、工芸品なんかを売っている。「山地民」の文化を知りたかったら、ドーイプイ、博物館、トレッキングに行けばいい。ドーイプイだつて、自然のまま、昔のままの文化だ。	遠くの山間に住んでいる、中国とかから来た人。北タイ語は難しいので話せない人もいるが、みんな学校で勉強するのでタイ語は話す。山の上にも学校があって、みんな行っている。
7		男	20代前半	観光客向けレストラン店員	町の人 (チェンライで育ち、チェンマイへ働きに来て7年)	知らない (聞いたことはあるが、場所知らない)	山の方に住んでいる人たちのこと。自分が子供時代育ったチェンライの家では、よく山へ鳥を撃ちに行っていたので、「山地民」の村の辺りへもよく行った。子供の頃は、「山地民」の人とも普通に知り合いだった。向こうは、いろんな言葉をしやべったものだ。でも、自分たちは全然違うのは確か。食べ物が変わり。汚いものを平気で食べる。でも今は、山の村も開発が進んで衛生や教育も向上している (蔑視していることを質問者に隠し、発展していることを理解していることを示すことで、自分の価値を高めようとしている様子)。

No	日	性	年	職業	アイデンティティ	博物館	その他山住民
8		女	40代	地元小料理店(ナイトバザール裏)店員	町の人(チェンマイで育ちチェンマイへ嫁に来て20年の人)	知らない(聞いたことがあるが、場所は知らない)	(道を歩く人の衣装を見て、「あの人はパヨー。イコーでもカリアンでもないわね」など民族を区別してくれる。これは、学術的な区別とは別の区別である)。週に2回くらい、遠くの山から下りてきて、物売りをしている。遠いので、ちよくは来られない。言葉ははっきりしないので、話せば「山住民」だとわかる。ナイトバザールで物売りをしている人々。
9		女	60代	洋服屋店主	町の人(チェンマイ市内)	知らない(聞いたことがない)	物乞い。働気がない。山にいても食べていけない。言葉(タイ語の発音)がはっきりしない
10		女	20代	喫茶店店員	町の人(チェンマイ市郊外)	知らない(聞いたことはあるが、どこにあるのかは知らない)	
11	25	男	50代	乗合タクシー運転手	北部人(チェンマイ市内)	ドイツ人が大好きなところ。自分の中には入ったことはない。タイ人は行かない。その辺りに「山住民」はたくさんいるから、わざわざ行こうと思わない。	「山住民」の村々も、現在ではほとんど開発が進み、生活はすっかり近代化している。「山住民」でも若い世代の日とは、みんな町の学校で勉強しに来ているから、タイ語も北タイ語も話せる。そうやって町で勉強した人たちは、その後町に残って、働いたりしている。カソリンスタンドとかが多い。北タイ人の若者はみんなバンコクへ出て行ってしまい、「山住民」の若者がチェンマイに出てきている。ああ、どうして同じ町で働いている人を「山住民」だとわかるかといえば、彼らはもともと「山住民」語を母語とする人たちだから、タイ語や北タイ語の発音が明確じゃない。そう、ちょうど外国人のあんたみたいな感じ。日本人訛り、中国人訛り、それぞれあるのと同じように、外国人それぞれ訛りとまた違う「山住民」の訛りがある。まあ、あんなのいうとおろ、見掛けは一見町の人と山の人で似ているかもしれないが、言葉の発音からわかるのさ。ほかにどんな違いがあるかといわれれば…。それはたくさんある。昔ながらの服や祭りなんかは全然違う。生活の仕方なんかも、それぞれ違う。「山住民」の人たちは、食事に火を通さず、原始人みたいに食べる。生肉でもへちやちやで食べる。虫でも火も通さずそのまま食べる。町の人であんな食事を食べられる人は、まずいない。

No	日	性	年	職業	アイデンティティ	博物館	その他山地民
12		男	30代	公務員(以 前、山岳地帯 のカレンの 村で、教員を していたこ とがある)	北部人(チェンマイ市 郊外)	よいところ。行けば面白いと思う。	「山地民」語なら、自分も話せる。カレン語は北タイ語よりずっと構造的単純なので、簡単。山の村に生まれた子供たちは、村で一生を終えるのが普通。わざわざ町へ降りてきて勉強しようという人は、自分がいた町では少なかった。
13	26	女	20代	事務員	イサーン人(コンケン から)、欧米人(観 光客)のアフィアンセ	知らない	貧しく、汚い、言葉がわからぬ人たちが。近くにこちら来たなら、やっぱ怖いと感じる。早稲多産。タイ人ではない人たち。
14		男	20代	レストラン ウエイター	チェンライの人	知っているが、行ったことはない。	ずっとずっと遠くの山の上に住んでいる人たち。ビルマとか、ほかの国からやって来た人たち。彼らは、タイ語でもビルマ語でもない、自分たちの民族(paw)語を話す。でも彼らの村々も、今ほもう王室やタイ政府の努力のおかげで、すっかり発展している。今はみんなちゃんと学校へ行くので、タイ語もすっかり上手に話す。衛生状態なんかもすっかりよくなっている。生の肉を食べる。町の人が汚くてとても食べられないと思うようなものを、「山地民」の人は平気で食べる。その辺、まったく異質な文化だ。
15	27	男	40代	乗合いタク シー運転手	町の人(チェンマイ市 内)	行ったこととはある。よく欧米人(観光客)を送っていく。見る価値のあるものがある。置いてある。	(「山地民」というのは)山の上の人のこと。タイ語を話すけれど、北タイ語は話せない。タイ語も発音がはっきりしないので、外国人より下手で、すぐわかる。
16		男	50代	乗合いタク シー運転手	町の人→山の人	いい場所のはず。自分が入ったことはないけれど、客として西欧人旅行客をたくさん連れて行ったことがある。	今はもう、貧しい「山地民」なんていない。みんな金持ちになっている。山の上の村だけにいるのではなく、そこらじゅうにいる。チェンマイ市付近の、あつちこつちに村を作っている。けれども、山の人も町に来たらもう、山の人ではなくて、町の人だ。
17	29	男	30代	乗合いタク シー運転手	町の人/チェンマイ 人	欧米人(観光客)や日本人が好きなどところ。欧米人(観光客)、日本人やマレー人をよく送っていくけれど、自分が中に入ったことはない。	「山地民」というのは、山の上に住んでいる人で、町の中では会えない。タイ語も北タイ語もはつきりとは話せない(発音が明瞭でない)。ドニー・プイにいる人たち。中国人と同じ(mwankan)人たち。何が中国人と同じかって?一顔も言葉も中国人と同じ人たち。
18		男	50代	乗合いタク シー運転手	町の人/チェンマイ 人	よく欧米人(観光客)観光客を送っていくが、自分が中に入ったことはない。	ずっとずっと遠くの山の上にいる人。何時間も車で行かないと、町の中では会えない人々。

No	日	性	年	職業	アイデンティティ	博物館	その他山住民
19		男	40代	乗り合いタクシー運転手/市役所職員(兼務)	町の人(メーリム(=チェンマイ郊外の地名)の人)	行ったことがある。「山住民」の文化についてわかる色々な物品が展示してある。	山の上において、タイ人が発展を助けている人々。(自分も毎週市役所の手伝いとして彼らの村へ村落の開発の手伝いに行く)
20		男	10代	ウェイター(始が、チェンマイの観光代理店の店主をしている)	中部タイの人	入ったことはないけれど、場所は知っている。ただし、興味深いところとは思えない。本場に「山住民」の文化を知りたかったら、やっぱり山の村に行かなければ、わからない。	(先日、自分が『首長』の人々の村へ行ってきたという話をした後、『山住民』はどのような人々なのか、という著者の質問に対して)『首長』の人たちは、習慣であらしななければならないので大変だと思う。でも、あれが彼らの文化なのだから尊重しなければならない。彼らの文化とタイ人の文化とは全く違うけれど、それも尊重しなければならない。(彼らはタイ国民= caat thai ではないのかという著者の質問に対して)あの人たちは、タイやビルマに住んでいるが、タイ人でもビルマ人でもない少数民族(khon krm noi)。森林の奥でひっそりと暮らし、太古の人間の素朴で温かな心を守っている。タイ人が自分たちの国の中に住ませてあげているので、タイ人が訪ねれば歓迎してくれ、感謝の意を示す。(先ほどの言で、彼らはタイ国民でないということだったが、タイ政府は彼らの居住を認めているのか、国民携帯証(bat pracacon)を持っているのか、という著者の質問に対して)あの人たちは、黄色カード(bat se ruang)というのをもっている。それがあれば、タイ人でも自由にも自由に移動できるし、不自由しない。
20		男	20代	ホテル勤務	チェンライ県メーサーアイの人	行ったことがある。中には、いろいろ興味深いものがあったって、本物の山住民の人たちが特産品を売っている。	(嘲笑の対象として、町の人である友達を「こいつはアカダ」とからかいながら)タイ語が明瞭でない。速い山の上に家がある。難民。「車の定期便は1日1便、朝5時に町を出て夕方6時に近くの村まで着いて、その後は自分の村まで2時間歩く。それでもしつかりチェンマイ大学の学生だ。もう開発が進んでいるから、タイ語を話すこともできるよ」。

No	日	性	年	職業	アイデンティティ	博物館	その他山地民
21		女	60代	ホテル経営	チェンライ県で生まれ育ち、チェンマイに嫁に来て30年以上の人	行ったこととはないけれど、ある場所は聞いたことがある。	(友達を、「こいつはアカだ」といって嘲笑してからかう若者といっしょにひとしきり笑った後で、筆者に向かって)「でも、『山地民』も、今はもう大分発展してるんだよ」(いっしょになって嘲笑して話に乗っておきながらやはり、形だけでも、発展に対し理解を示すことが「分別ある大人」の証拠という雰囲気)。
22		女	40代	飲食店勤務	町の人/チェンマイ郊外	行ったこととはない。ある場所は知っている。	山の上に住んでいる人々。顔は自分たちとあまり変わらないけれど、服などが全然違い、いろいろな点で全然違う。
23		女	30代	雑貨店店主	町の人/チェンマイ市内	あることは知っているけれど、行ったこととはないし、別に行きたいとも思ったことかもない。外国人には珍しいので面白いかもしれないが、自分たちには、珍しいということでもない。	遠い山のあたりに住んでいる人々。
24		男	40代	乗合いタクシー運転手	町の人→山の人	自分が入ったこととはないが、西欧人旅行者が好んで行く。	山岳地帯では水が冷たいので、昔は山の人は水浴びをしなかつたので汚かったが、今では毎日水浴びしているので、すっきり清潔になっている。山の人といえ、昔は無学だったけれども、今はチェンマイ大学を卒業した人も多し、チェンマイ教育大学の先生になった人もいる。たしかに山の人の中には、北タイ語は発音を話せない人が多いけれど、タイ語の方はみんな流暢で、タイ人と変わりない。山の人は、山にいれば自分たちの言葉が話すが、今はタイ語に加えて英語を流暢に話す人がたくさんいる。そんな風にならうけれど、町に来ていられれば町の人だし、山にいられれば山の人だ。
25	30	男	40代	乗合いタクシー運転手	町の人/チェンマイ市内	欧米人(観光客)や日本人を迷わせたこととはあるが、自分が入ったこととはない。興味もない。	遠い山の方に住んでいる人たち。

No	日	性	年	職業	アイデンティティ	博物館	その他山住民
26	31	男	40代	乗合いタクシー運転手	北部の人／サンカムペーンの人	観光客を送っていったことはあるけれど、自分が入ったことはない。欧米人（観光客）、日本人、中国人、タイ人などみんな行く。	車で5時間も6時間もかけて山を登らないと会えない人たち。一見、タイ人と見かけが似ているかもしれないが、生活や何かがタイ人とは全然違う。だからタイ人なら誰でも、『山住民』を見ればすぐにわかる。雰囲気というか、特質がある。（そのとき、偶然道端に立っていた人々を指指して）「ほら、あれは『山住民』だよ」。(なぜわかるのかという著者の質問に対して)「だから、あの雰囲気だよ。なんとなく、あるんだよ」(最後まで、侮蔑を表す表現は口にしなかった)。
27		男	30代	博物館前に常駐するアイスクリーム行商人	欧米人（観光客）や日本人がいろいろ行くよ。「山住民」観光と言えばドゥーイブイだね。アイスを売りに行くが、本当に沢山観光客が来ているよ。	自分の中には入ったことはない。でも欧米人（観光客）、日本人、中国人、台湾人などがたくさん来る。一番多いのは断然欧米人（観光客）だ。タイ人は学校遠足で来ることが多い。欧米人（観光客）は、1人でも4、5人の集団でもよく来る。ホテルのタクシーで送迎されて来たり、英語ガイドつきツアーに乗って来たり、1人でタクシーやトウクタクに乗って来たりが多い。	ドゥーイ・ブイにしている人たち。学校へ行くから、タイ語も話すけど、発音がはっきりしない。彼らの言葉は別にある。

図表5：ミドルマンへのインタビュー結果

No	日	性	年	職業	トレッキング	博物館	その他山地民
1	12/21	女	20代	代理店窓口	自然がいっぱい、「山地民」を見られる	行ったこと、あるある。いいところ。「山地民」の人たちの伝統的な生活がわかる。	山奥で生活している人、自分たちと…服とか違うわ。町の中に来てるのは、ナイトバザールに物売りに来ている人々。
2		女	30代	代理店窓口	ジャングルと「山地民」の文化について学べる。筏や象に乗って楽しめる	行ったことはないけれど、よいところだと聞いている。「山地民」の人の服や工芸品がみんな置いてある。	生活の仕方は清潔とは言えないけれど、だからこそ自然のままの生活を享受している人たちね。町に近い村では、もう近代化がんでしまっているけれど、山奥の村まで行けば、今でも昔のままの生活をしている人々がいる。
3		女	10代	代理店窓口（教育大学インターン生）	間欠泉や滝といった名所を見たり、山の中の大自然を見られる。	知っているけれど、行ったことはない。「山地民」の文化に興味があるのなら、行ってみたいと思う。	そこら中の山にいる人かな。自分たちと…服やいろいろ違う。町の中にいる人もいろいろいるけど、まだ山の生活をしている人も多い。山の生活も近代化しているが、でもやはり服とか違うままだから、行っておもしろいだろう。
4		女	50代	代理店店主	自然の中を歩き、「山地民」の人を見られる	行ったことではないが、場所は知っている。「山地民」の人の文化についていろいろ知ることができる。行ってみるのもいいと思う。	もともと町の人より遅れていたが、今では開発が進んで生活レベルや教育も向上している。ただ、まだまだ生活は見るのに興味深いものがある。町の中で学ぶ子供も多い。
5		女	20代	代理店窓口	「山地民」の文化を見て、ジャングルの中を歩くことができる。象にも乗れる。	行ったことある。よいと思う。「山地民」の文化について知ることができる。	町の人と変わらない。昔のままの生活をしている。若い人は町に下りきて勉強しているから、タイ語がわかる。
6		男	60代	代理店店主	自然の中を散策し、珍しい「山地民」の文化に触れることができる。筏で川くだりをしたり、象に乗るなど、自分の国ではできない体験ができる	行ったことある。「山地民」の人がいて、衣装や工芸品を買うこともできる。	町の人である自分たちと、あまり何が違うということもないような気がする。服とか違うが、生活の仕方は似ている。今では、山の村に行っても扇風機があったりテレビがあったりして、近代化の波が押し寄せている。

No	日	性	年	職業	トレッキング	博物館	その他山住民
7	24	男	20代	ツアーガイド	珍しい首長族に出会える	行ったことある。とても興味深いところ。「山住民」の生活について調べてがわかる。	実は悲惨な人々。ビルマから難民でやっ来てたため、市民権もない。そのため学校に行くこともできない。やぐざやぐそれに近い人々に寄り添って、見世物にされて生きていくしか方法がない。そうでなければ、親が子供を売春宿に売り飛ばすしか生きていく術がない人々
8		男	40代	ツアーガイド	普段の生活で見たこともない自然を堪能したり、文明社会にはいない人々に会える。	行ったことは…。行った人は、みんな興味深いと言う。	国境の側にいる人々。独自の文化を守っている人々。
9	25	男	50代	山住民博物館員	トレッキングでは本物になんて会えない。俺は本物の「山住民」の村を山ほど訪ねている（優越感）	長年かけて集めた、よい資料のコレクションだ。消え行く文化も、ここに持ってきておいたものは、いつまでも残る。	どんな生活が変わって、伝統文化が消えつつある人々。伝統文化を保護してやる (hai raksana) ために、できるだけ早急に努力しなければならぬ
10		男	50代	山住民事務所員	観光客を喜ばせるため、旅行代理店がいろいろ画策しているもの。	「山住民」関連の資料を、後世に残す場所。	山にいる人でも、タイ人はみんなタイ市民権を持っている。市民権を拒否していた「山住民」の人々も、近年では市民権の必要性を認識しはじめたことは、よい傾向だ。
11		女	40代	市役所職員／旧山住民研究所員	観光化の悪い影響についても分析する人間が必要だ	これからは、山に住む若者、町に住む若者、双方の「山住民」の若者の自文化への理解と誇りを高めるための結節点として利用していくべきだ。	上の世代と若い世代との世代間乖離が激しく、伝統文化が消滅しつつある。危機的状況にある。どこかでこれに対処しなければならぬ。
12		男	50代	市役所職員 山住民福祉担当 勤務／旧山住民研究所員	観光化のいい面、悪い面、双方に目を向けなくてはならない。	これからは、山に住む若者、町に住む若者、双方の「山住民」の若者の自文化への理解と誇りを高めるための結節点として利用していくべきだ。「山住民」とタイ人の相互理解促進のために使うべきだ。	新しい問題を日々抱えつつある人々。

No	日	性	年	職業	トレンギング	博物館	その他山地民
13		男	30代	ツアーガイド	村の経済の発展に貢献し、村人のためにもなっている	「山地民」の文化について知る貴重な機会であり、とても興味深いところだよ。「山地民」の文化について理解を深める人が増えたらうれしいことだよ。あれは一見に値すると君にも薦めたいね。	山地民博物館に入ると外国人観光客に対して「この入り口の両側にある門は、多くの「山地民」の村の入り口にあるもので、特にアカの村には欠かせないものです。この門はアニミズムにもとづいた結界を意味しており、この門を越えて結界の中に入ったときには、部外者はむやみに周囲のものに触れてはなりません。厳粛に。」
14	26	男	50代	山地民博物館員	村人の発展への意欲を極き立てるのに役立っている。けれども、観光化のいい面と悪い面と、両方を注意深く見ていかなくてはならない	村人の伝統的な衣服や道具が大変よく揃っている、貴重な場所だ	(ドーイブイ村の祭りで) 町に降りて勉強している若者も山の学校に通っている若者も、一丸となって自分たちの伝統的な祭りを祝うのは、とてもよい傾向だ。若者が自分たちの伝統文化を守っていいこうとする姿勢は貴重である。
15		男	50代	山地民博物館員	「山地民」にも収入ができる(宿泊料として 20 - 30 パーツを受け取るなど)。	各村の小さな山地民博物館は、チェンマイの山地民博物館職員が赴いて展示に協力している。だからどの博物館も、きちんとしたものになるのだ。	町に下りてきている「山地民」たちは、民族の名前とタイ名と名前が 2 つあって、名前からは「山地民」出身であることはわからない。言葉も、幼いうちから町の学校に来ていればわからないほど北タイ語が上手な若者もいる。しかし、北タイの人であれば、顔を見て、顔つきの特徴から「山地民」の何旗出身だと言いうことができる。(日本人が似ていると言おうと) 微妙な違いから、はつきりと区別することができるのだ。
16	30	男	30代	代理店担当者	ジャングルの中で珍しい首長族に会える。象に乗ったり筏に乗ったりもできる。いっしょに過ごしたツアー客と、いい仲間になれる。	自分が行ったことはないが、「山地民」文化に興味があるのなら、行ったらいいと思う。	タイ人とは違う、とても原始的な生活をしていて、とても変わった文化を今でも続けている人々。彼らも観光客が来てくれるのを喜んでいる。

No	日	性	年	職業	トレッキング	博物館	その他山住民
17	31	男	20代	代理店店員	アドベンチャーを体験でき、見たこともない珍しい首長族 (long neck people) に出会える	ツアーを準備している。トレッキングの前でも後でも、行けば知識がより深くなるだろう	彼らはタイ人ではない。タイ人とは違う5つの民族の人々がタイの山の奥に住んでいて、独自の文化を守っている。ある人は首長族、ある人は耳長族である。
18		女	20代	代理店担当者	象に乗ったり筏に乗り、人里は慣れた山の奥で古代のままの生活を守る珍しい人々に出会える。	トレッキングのための知識を準備でき、いい場所だろう。行ったことはないが、博物館についての資料を読んでるので、よく知っている。だからお奨めできる。	独特の文化を守っている人々。
19	1/1	男	30代	ツアーガイド	外国人観光客が大好き。日本人、タイ人、中国人といった人たちは、馬鹿らしくてあんまり行かない。敢えて言えば日本人の学生くらいのものか。山の人の人に貢献している。	まあ、いいんじゃないか。	山の奥に住んでいる人々。難民。
20		男	50代	代理店店主	ジャングルでアドベンチャーを経験し、森の奥深くにひっそりと住む少数民族の人たちの村で一夜を過ごすことができる。	「山住民」の人がいて、独特な衣装や山の特産品や、自分たちがつくった工芸品など、いろいろ興味深いものを売っているところだよ	独特な文化を守り続けている人びと。